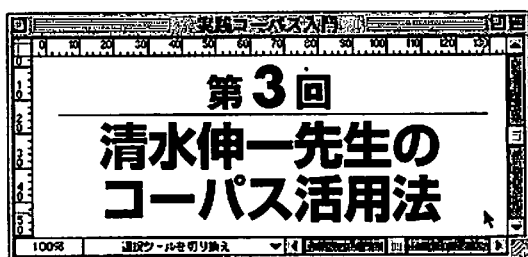


投野式 実践 コーパス入門

公開! 授業に生きる活用術



明海大学 外国語学部教授 投野 由紀夫



さて、コーパスと具体的な英語授業実践をケーススタディ風にご紹介しているが、今回紹介するのは愛知県にある安城学園高等学校の清水伸一先生の実践だ。清水先生は知る人ぞ知る「テキスト処理の達人」だ。清水先生は私と知り合う以前からテキストの語彙集計や学習語彙表の研究を独自にされており、大学英語教育学会の学習語彙表である JACET4000 の改訂作業でご一緒した際も、JACET8000 の基礎データ処理を一手に引き受けて perl というスクリプト言語を使って処理されたような方である。

その清水先生の授業実践へのコーパス活用法は多岐にわたるが、今回はその一例を拝見しよう。



清水先生の実践の1つとして高校3年生に実施した選択の英作文の授業を紹介しよう。

投野：この選択英語の授業はいつ頃からやってらっしゃったのですか？

清水：今回紹介したのは1997～98年の実践をLLA(現LET)で発表したものですので、もう10年近く前です。

投野：私がランカスターに行く前ですね。具体的にはどのような内容だったのでしょうか？

清水：高校3年生の選択英作文の授業です。年間を通じてコンピュータを使って英作文をさせます。その中心は電子メールによる海外のペンパルとのやり取りなのですが、さらに、生徒個人のホームページ作成、ストーリー・リレーへの参加、調査・まとめ学習等も行いました。

当時は Windows なら 95 環境、マックの方がやや進んでいた時代だが、インターネットへの接続なども非常に面倒くさかったはずだ。実際にお聞きしてみると、電子メールの送受信はまだ生徒一人ひとりが自由に出来る環境ではなかったようで、清水先生が各自のメールをすべて1つのアカウントから送受信を代行されていたと言う。実に涙ぐましい努力ではないか!

清水：1つのメールアドレスですべての送受信を行っているのが逆にメリットでもあるんです。このアカウントを使用したすべてのメールのファイルが私の手元に時系列で残りますからいつでも閲覧可能となります。着信したメールはプリントアウトして生徒に手渡します。授業のない日でも着信があるかどうか分かるようになっていました。電子メールの相手は海外から送ってくるので主にクラスを単位としていましたが、個人的なメール相手も各生徒に一人程度の割合でいましたね。

投野：最終的にどのくらいの分量になったんですか？

清水：1997年だけで送ったメールの総数は1500

以上。LLA で発表した際の学習者コーパスのサイズは15万語にもなりました。

つまり、このような一見教師には過酷な環境を逆手にとって、生徒の作文をコーパス化するという方法をとっていたわけである。1年間で集まったデータ量も相当なものだ。

今はいくつかのことがあつたという間に出来る環境が整っている。当時の清水先生の100分の1(?)の手間でデータが集まるのであるから、先生方も是非やってみたいかがだろうか?



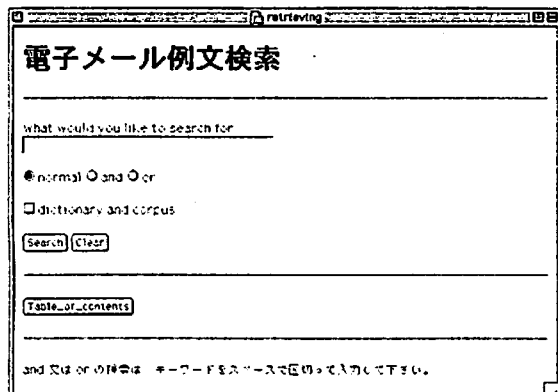
手紙例文集をコーパス化

投野：手紙を書かせる際にもコーパスを利用していたそうですね。

清水：手紙例文検索用のコーパスは、生徒がブラウザで検索しながら、それを参考に電子メールを作成できるように作りました。トータルでは数冊の手紙の例文集を、OCRや打ち込み等で入力してあります。授業用なので市販のものを自前で作成しました。また、実際の電子メールから適当な表現を抽出し、付け加えてあります。

投野：たしかに作文の書き方をいちいち生徒のレベルに合わせて教えるのは難しいですものね。

清水：はい。授業では統一の教材が基本的には存在しないため、個々の生徒の質問にすべて答えることはできないので、このような補助資料は必須となります。補助資料としては、他に、電子辞書やスペルチェッカーを使用しました。



電子メール例文検索用ページの例

投野：生徒は授業以外でも資料を見られるのでしょうか?

清水：ええ、このコースで使用したコンピュータは図書館に設置してあり、授業時間以外でも使用できたんです。コンピュータの台数が十分ではなかったので、1台のマシンを2人で使用させました。

この授業は清水先生以外に外国人教師が1名専属ではりついていた。それでも、具体的な英作文の際に生徒が持つ疑問に教師がすべて答えることは難しい。それを「手紙例文集」をコーパス化し、電子辞書などと組み合わせた補助資料を作ることで、生徒が「自分で調べて書く」という学習の習慣付けをしているわけだ。

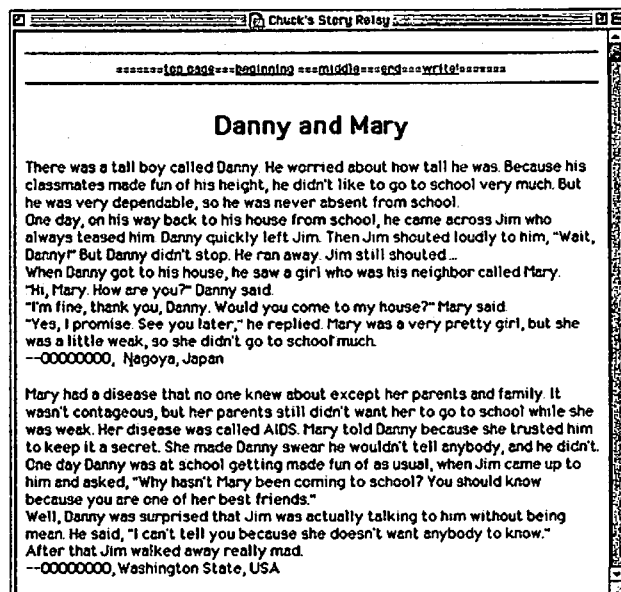
さらに97年の当時に、パソコンをなるべく自分で自由に触れられる環境(これを self-access という)にしている。「環境整備の重要性」を改めて感じさせてくれる。



ストーリー・リレーと 生徒のホームページ作成

投野：電子メール以外にホームページ作成なども紹介してください。

清水：私としてはこの授業では電子メールはコミュニケーション、ストーリー・リレーとホームページ作成は英作文とわりきって考えました。ストーリー・リレーは web ページ上で物語をどんどん付け加えて発展させていくものです。(サンプル web 画面参照)



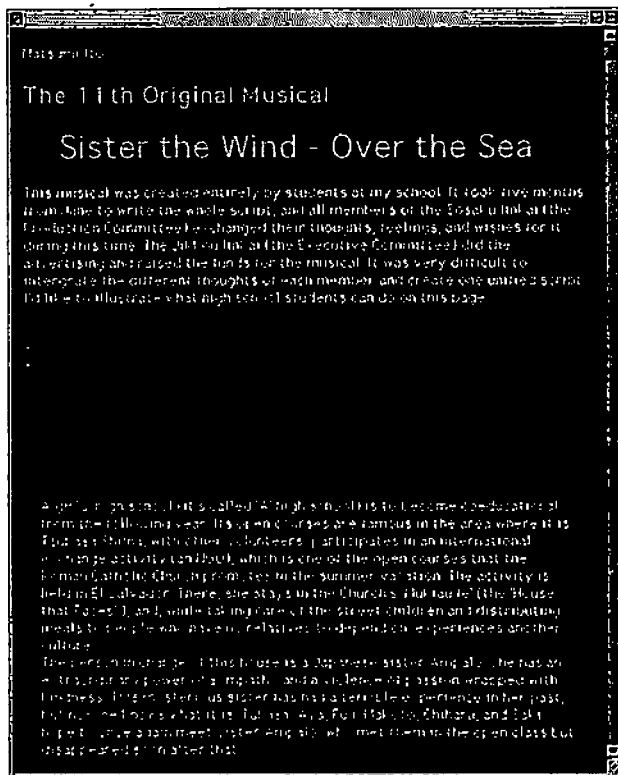
ストーリー・リレーの一部

これは世界中で見ることが出来るので、交流している海外の生徒がストーリーに参加することが出来るようにしてあります。

投野：なかなかクリエイティブですね。

清水：生徒は我々が想像する以上にアイデアが豊富ですよ。生徒のホームページも自分達が主催したミュージカルの製作過程を英語で発表したりしています。(サンプルweb画面参照)

投野：書く内容があると生徒はノッてくるわけですね。



生徒のホームページの一部

清水先生の見せてくださったページはどれもそれほど高度な英文ではなかったが、高校生がここまで書くのか、と思うほど内容的にクリエイティブだった。英語としてpolishするというよりも「たくさん書かせるためのタスクと環境づくり」というのが清水先生の基本的な方針のように思えた。



投野：見せていただくと素晴らしい限りですが、ご苦労も多かったでしょうね。

清水：とにかく時間をとられる点です。電子メールの送受信も一人でやりましたし、こういった授業を可能にするためのコーパス整備やコンピュータ環境作りに膨大な時間をとられましたね。

我々英語教師は日々学校のさまざまな雑務に追われている。授業が命、ということはわかっている、つついチャイムが鳴って教科書1冊わしづかみにして生徒にチラッと悪いな、と思いながらもその場限りの授業をしてしまう、ということがままあるだろう。

その時に大事なものは、「少し長期的に見た時の授業設計」ではないだろうか。清水先生のような環境を作るのは大変な労苦であるが、いったん作ってしまうと授業は生徒中心になる。教師は環境整備のアドバイザー的な立場として生徒の学習をサポートする。その方が、付け焼刃の準備で必死に黒板で文法説明しているよりも生徒の英語力は伸びたりする。

投野：今回の実践で特に収穫があった、というのはどのような点でしょうか？

清水：授業の内容自体が生徒の興味を引き付けるので、授業時間以外にも自分達で率先して様々な準備をしてくるようになることです。もちろん個人差はありますが。それから生徒のアウトプットを学習者コーパスとして分析することができるので、その面からの語彙・構文的弱点を指導することができます。

投野：海外のペンパルとの電子メールもよい刺激になるでしょうね。

清水：異文化理解の面で、大きな効果があります。メールの相手は、どちらかと言えば移民やアジア圏の子供達の方が多いので、様々なことを知らされます。例えば、子供を育てながらアメリカの高校に通うメキシコ移民の女の子や、明日出航するというメールを最後に音信不通になった海軍の青年など…

投野：そういったことすべてが英語を通して体験できているというのが素晴らしい。

清水：英語に触れる時間は通常の授業よりも圧倒的に多いでしょうね。特に、メールを書くには、相手からのメールを読まないといけないので、個々

に違うものを受け取りますので、自分で理解する
しなくなります。読む目的や動機も自然と出て
くるわけです。そういった意味で非常に総合的な
スキル養成の授業になります。



変化する生徒の英語力

最後に清水先生ご自身が効果検証をしたと言うデー
タについてお聞きした。

投野：LLAの発表では、97、98年の実践結果をもとに
語彙量が増えたかどうかなどを検証されていましたね。

清水：はい。結論から言うと、こういった「英語に大
量に触れさせる」というプロジェクトワーク型の授
業によって、2000語レベルの語彙サイズには顕著
な伸びが見られました。また短期的にも電子メー
ルプロジェクトに参加した生徒とそうでない生徒
では、学習目標語彙30語の語彙知識測定で有
意差が見られました。

投野：大量のインプットの効果があったと言うことですね。

清水：インプットだけでなく、自分の中でそれをプロ
セスするようなタスクの与え方が効果を決めると
思います。



まとめ

清水先生の実践はコーパス利用の英語教育として
は先駆的なものだ。それに関わらず、すでに当時、現
在問題が指摘されているようなさまざまな e-learning の
効果研究に対する配慮も怠っておらず、実践のみなら
ず研究としても大変先見性のあるプロジェクトだったと
いえよう。

清水先生は情報処理の1級を持っているようなコン
ピュータ技術のプロである。だから出来るという部分も
確かにあるかもしれない。しかし、現在は清水先生がや
ろうとして苦勞した多くの技術的な部分がかなり一般の
我々にも簡単に実現できるような時代になっている。

大事なものは「生徒につけさせてあげたい英語力のイ
メージ」である。それにふさわしいタスク、それにふさわし

清水氏はさらにいくつかの電子メールを利用した授業
のポイントを紹介してくれた。ここに簡単にまとめておこ
う。

ポイント

- (1) トピックが単調にならないように指導する。
- (2) 徐々に例文集や辞書の表現から自立し、
独自の表現を用いるよう励ます。また、形式
よりも内容を重視するよう励ます。特に教師
への依存度が高く、主体的に取り組めない学
習者を早期に発見し、指導する。
- (3) 短期間での作業内容から長所を見つけ、
それを各学習者にフィードバックしてやる。
また、そのような方法を考案する。
- (4) (2)を含めて、個別学習に対応できるよ
うなシステムを構築する。特にコンピュータを
用いて自動化・データベース化していかなけ
れば教師の負担が過剰になり現実的でなく
なる。また、データベース化することにより、
教材として利用できる可能性もある。
- (5) 電子メールの返事が来なくても学習
者が焦ったり不安を抱いたりしないよ
うに、体系的な学習指導計画を立
てる。



い学習環境…そのような自然な発想で、日々の授業を
改善していきたい。その際にコーパスが役立つと思え
ば、使えばいい。ちょっと先まで授業計画を引っ張って
みて、年間ベースでの指導など、全体の環境を変えら
れるような発想が出
てくれば、あなたもコ
ーパスの活用法やそ
の威力をもっと身近
に感じられるかもしれ
ない。



清水伸一先生